

## 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 早津恵美子



学位申請者 張志凌（チョウ シリョウ）

論文名 複合動詞「～こむ」の意味体系－中国語との対照的視点から

### 【審査結果】

本論文は、現代日本語の複合動詞「～こむ」（「持ちこむ、すわりこむ、考えこむ」等）の意味体系を、中国語の対応表現と対照することによって解明しようとする論考である。理論言語学（統語論）・認知言語学・日本語学の先行研究を広く渉猟し、その知見を実証研究に生かそうという明瞭な意識のもとでなされた意欲的かつ独創的な研究である。「～こむ」を中心とする日本語複合動詞研究に対して理論面でも実証面でも貢献しうる学術的価値の高い研究となっている。日本語教育における語彙・文法指導に対しても貴重な示唆を与えうる論考でもある。最終試験（公開審査）においては、質疑応答を通して、この問題に対する張氏の深い理解が確かめられ、今後の研究を着実に発展させうる力量がうかがえた。

以上、論文審査と最終試験の結果にもとづき、審査委員会は全員一致で、張志凌氏に博士（学術）の学位を授与するのが適切であると判断した。

なお、審査委員会は、早津恵美子を主査とし、本学の望月圭子教授（主任指導教員）、三宅登之教授、および学外の于康教授（関西学院大学・日本語学）、彭広陸教授（北京大学・日本語学）を副査とする5名で構成された。

### 【論文の概要】

本論文は次のような構成となっている。

序章

第一部「～こむ」の意味研究

第一章「～こむ」に関する先行研究及びデータによる検証

第二章「～こむ」における内部移動の意味概念について

第三章「～こむ」の副詞的意味について

第四章「～こむ」に対応する中国語表現の全体像

第二部「～こむ」に対応する中国語表現

第五章「～こむ」と方向補語との対照研究

第六章「～こむ」の副詞的意味と中国語表現との対照研究

第七章 結論

序章で研究目的、研究方法、論文の構成が述べられたあと、第一章「「～こむ」に関する先行研究及びデータによる検証」では、先行研究として、主として影山太郎（1993）『文法と語形成』、姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』、松田文子（2004）『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通して』、松本曜（2009）「複合動詞「～込む」「～去る」「～出す」と語彙的複合動詞のタイプ」の議論が紹介される。そして、その中の松本（2009）の意味分類を基準にして、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（国立国語研究所）から得られた複合動詞「～こむ」の用例が分析される。その結果、前項動詞が固着を含意する非典型的な移動動詞（「埋める、貼る」）、姿勢動詞（「すわる、かがむ」）、作成動詞（「描く、刻む」）の場合、他の複合動詞（「乗る、入る、飛ぶ」などを前項動詞とするもの）とは性質が異なり、個別に考察する必要があるという点が明らかにされる。また中国語との対照研究の視点から、この三種類の前項動詞を有する「～こむ」に対応する中国語表現は、中国語で主に「内部移動」を表す＜～进 jin＞とは対応し難いとされ、これらの「～こむ」の意味の再分類は、中国語との対照という視点からもより明確になるとされる。

第二章「「～こむ」における内部移動の意味概念について」では、内部移動の意味概念を有する「～こむ」の諸特徴について考察される。まず、内部移動の意味を表す「～こむ」には、前項動詞が「移動の様態・手段・付帯状況を表す」もの（「走りこむ」）、「経路位置関係を包入する」もの（「入りこむ」）、「付帯変化を表す」もの（「はめこむ」）がある。このような前項動詞との結合から後項動詞としての「～こむ」は、「内部への移動→存在→固着」という意味的な連続体を成す。また、このような意味の連続体を成す形式として、単純動詞「入る」も挙げられ、その分析が「～こむ」の分析に生かされる。その一方で、「～こむ」は移動を表さない作成動詞、姿勢動詞、心理・生理を表す動詞を前項動詞とすることもある（「刻みこむ、すわりこむ、しょげこむ」）。姿勢動詞等は状態変化を表すが、これに関しては本研究の提案する「内向移動」として捉えられている。さらに量や価格の減少や情緒の低落を表すもの（「（売り上げが）落ちこむ、ふさぎこむ」）も内向移動に分類される。

第三章「「～こむ」の副詞的意味について」では、「～こむ」の副詞的意味（ここでは主として評価的な意味）について論じられる。ここでは「～こむ」の多義性を捉えるうえで、上述の姫野（1999）及び松田（2004）の意味分析では不十分であることを指摘し、樋口（2001）「形容詞の評価的な意味」における「評価」の枠組みから分析を行う。その結果、「～こむ」の副詞的意味として、「深部移動」（「海底深く沈みこむ」）、「固定感」（「どっしり座りこむ」）、「目的性」（「試合に備えて走りこむ」）、「密集感」（「家が建てこむ」）、「多量性」（「どっさり買いこむ」）及び「異質性」（「猫が会議室に入りこむ」）の6つがとりだされている。このうち、「異質性」とそれ以外の5つがそれぞれ、樋口（同）のいう「価値づけ的评价」と「資格づけ的评价」を表すものとされる。また、「異質性」における考察から、一部の「～こむ」は敬意表現と共起できない（「\*どうぞお入りこみください」）という現象が合理的に説明されている。

第四章「「～こむ」に対応する中国語表現の全体像」では、「～こむ」に対応する中国語の対応表現を明らかにするという観点から考察が行われている。ここでは主に『中日対訳コーパス』（北京日本学研究中心）から収集した用例をもとに議論がすすめられる。その結果、「～こむ」の対応表現として、内部移動を表す方向補語<～進 jin>や<～上 shang/下 xia/到 dao>によるものがかなりみられるほかに、「～こむ」の前項動詞が作成動詞と姿勢動詞の場合は、付着と存在を表す<～在 zai/有 you/着 zhe>が対応することが明らかにされている。

第五章「「～こむ」と方向補語との対照研究」では、中国語方向補語<～進 jin/上 shang/下 xia/到 dao>及び<V+在 zai/有 you/着 zhe>が表す意味の領域について考察されている。<～進>は「～こむ」と同様、内部移動を表すが、「～こむ」のような意味拡張が行われない。<～上>は「～こむ」とは異なり「移動→付着→目的の達成」という意味拡張のプロセスを辿る。また、<～下>は下方向への移動から、下方向への姿勢変化、作成まで広く表現できるため、その多くが「～こむ」と対応関係にある。<～進>は着点の内部空間を強く要求するが、<～在>は着点の空間的性質を指定しない。さらに受け身文の場合、<～有/着>表現が用いられる、といった種々の特徴が明らかにされている。

第六章「「～こむ」の副詞的意味と中国語表現との対照研究」では、第三章で検討された「～こむ」の副詞的意味（評価的意味）と中国語との対応表現について考察されている。その結果、「～こむ」に含まれる評価的意味は、中国語では、<沉 chen/深 shen+ V>、<V+着 zhe+補足説明>、動補構造<V得 de～>などの諸形式によって表現されるという対応関係がみいだせるという。さらに、中国語を母語とする日本語学習者にとって「～こむ」が習得困難であることとの関係も考察されている。

第七章「結論」においては、これまでの議論である「～こむ」における内部移動の意味概念、ならびに「～こむ」の副詞的意味（評価的意味）について総括されている。

#### 【最終試験（公開審査）の概要】

最終試験（公開審査）は2014年1月25日（土）10:00～12:00に、東京外国語大学本部管理棟2階中会議室において実施された。はじめに張志凌氏より、博士論文の内容についてプレゼンテーション形式で説明が行われた。その後、各審査委員より評価が述べられるとともに質問がなされ、それに対して張氏より考えが述べられた。

#### 【講評】

本論文は、複合動詞「～こむ」の意味体系を、中国語の対応表現と対照することによって解明しようとする論考であり、その目的はかなり成功している。理論面の先行研究を幅広く学び、一方でコーパスによる検証も行うという意欲的な論考である。日本語学において複合動詞「～こむ」の研究にはかなりの蓄積があるが、本論文は、中国語母語話者である張氏が自らの日本語学習経験のなかで感じてきた疑問を常に大切に、張氏ならではの視点と方法論でこの問題に必死に取り組んできたことがよくうかがえる労作である。そうい

った努力により、本研究は「～こむ」を中心とする日本語複合動詞研究に対して、理論面でも実証面でも貢献しうる学術的価値の高い研究となっている。また、中国語母語話者への日本語教育、さらには日本語母語話者への中国語教育に対しても貴重な示唆を与えうる論考でもある。

本論文の内容について各審査委員から様々な面から評価がなされた。高く評価できる点は、上のことに加え次のような点である。

(1) 複合動詞の後項成分「～こむ」の意味拡張について、「内部移動→存在→固着」という連続体をなしていることを意味の観点から論じたこれまでにない記述的研究である。

(2) 「～こむ」の前項動詞が「移動動詞」であるか「非移動動詞」であるかに注目し、特に「非移動動詞」、即ち「作成動詞」「姿勢動詞」「心理・生理を表す動詞」「思考活動を表す動詞」との複合において得られる「～こむ」の意味について、丁寧に論じられていて、興味深い指摘がなされている。

(3) 「～こむ」の意味を「評価性」（「資格づけ的评价」「価値づけ的评价」）のあり方から分析するという、これまでの複合動詞研究ではなされていない観点から分析し、複合動詞「～こむ」にいくつかの評価的意味があることが明らかにされている。

(4) 「～こむ」と対応する中国語の表現が、内部移動を表す<进 jin>、付着を表す<上 shang>、移動先である場所を焦点化する<在 zai>、到着点を焦点化する<到 dao>、行為の結果状態を焦点化する<有 you/着 zhe>、といった成分に対応することを論じ、日本語の「～こむ」には「内部移動」という三次元的な空間認識表現が卓越しているのに対し、中国語においてはむしろ、付着・移動先の場所・着点・結果状態といった二次元的な空間認識表現が卓越している、という両言語の相違を見出し、両言語の空間認識表現の特質が明らかにされている。

(5) 巻末に付録として、「～こむ」と対応する中国語表現が6タイプにわけられて例文集として示されており（全44ページ）、それは日本語学習者に対する複合動詞の教育、及び中国語学習者に対する結果補語の教育等において大きく貢献する資料となっている。

以上の諸点が高く評価された一方で、各委員からいくつかの疑問点や再考すべき点が指摘された。次のようなものである。

(1) 複合動詞のなかでも解明のむずかしい「～こむ」にとりくみ、理論言語学を広く学んで分析しようとする姿勢は評価できるが、理論面の議論の理解が必ずしも十分でない感も否めず、個別の現象からの理論的一般化という点にも課題が残る。また、統語レベルの考察なのか認知レベルの考察なのかがやや不明瞭である点がある。

(2) 言語学的な理論研究・実証研究、および日本語教育への応用がひろく目指されているのはよいことだが、目的がやや散漫になった感もある。

(3) 動詞や文法概念（たとえば「状態変化」等）について、いろいろな分類が行われているが、その際のそれぞれの定義および各類への分類基準がやや不明瞭である。

(4) 「～こむ」の意味が「内部移動→存在→固着」という連続体をなす拡張であるとい

うのは興味深い指摘であるが、なぜ内部移動から拡張が起こるのか等、意味拡張のメカニズムがもう少し説得的に述べられるとよかった。

(5) 日本語の複合動詞の研究は、中国および台湾においても盛んに行われており、本研究に直接関係するものも少なくないが、それらがあまり参照されていないのが惜しまれる。

以上のような問題点の多くは、張氏が、理論研究と実証研究、言語の研究とその教育への応用、日本語の分析と中国語の分析、といった幅広い関心をもって研究を進めてきたことから生じたものだと思われる。したがって、本論文において不十分な点が残っているとしても、今後それぞれについて十分に発展させていくべき土台を作った論考として、本論文の価値は張氏にとっても大きいと思われる。審査委員からの種々のコメントも、張志の研究の今後の進展を期待しその方向を示そうとするものであった。

#### 【総合的な判断】

本論文は、研究の対象についても方法についてもすぐれた論考であり、「～こむ」を中心とした日本語複合動詞研究に寄与するところの大きい着実な研究である。最終試験においては、論文のいくつかの不備について審査委員から指摘しそれに対する張氏の考えをたずねたが、その応答から、張氏が本論文の成果を不備も含めて冷静に自覚しており、不備については補うべき方向を見出しつつあることがうかがえ、本研究をもとにさらに研究を発展させていける研究者としての資質が備わっていることが確認された。

以上の論文評価および最終試験での質疑応答の内容から、本論文は本学の「総合国際学研究科博士学位論文評価基準」を十分に満たしていると判断された。よって審査委員会は全員一致で、学位申請者 張志凌氏に博士(学術)の学位を授与するのが適切であるという結論に達した。